



Data 2022-62

監督: 白石和彌
原作: 榎木理宇『死刑にいたる病』
(ハヤカワ文庫刊)
出演: 阿部サダヲ/岡田健史/岩田剛典/中山美穂/宮崎優/鈴木卓爾/佐藤玲/赤ペン瀧川/大下ヒロト/吉澤健/音尾琢真/岩井志麻子/コージ・トクダ/神岡実希

👁️👁️ みどころ

出版不況の中でも、サスペンスホラーは根強い人気がある。私は榎木理宇の人気小説『死刑にいたる病』を知らなかったが、白石和彌監督がそれを映画化した本作は興味深い。

『羊たちの沈黙』(91年)では、精神科医のレクター博士とFBI訓練性の“知恵比べ”が見モノだったが、本作では町のパン屋さん然とした怪優・阿部サダヲのサイコぶりが見モノだ。9件のうち1件だけはホントに冤罪?彼が幼い兄弟に指導した“痛い遊び”とは一体ナニ?

50年近い弁護士歴を持つ私には違和感も目立つが、“死刑にいたる病”というテーマを突き詰めた意欲には拍手!もっとも、鑑賞後のモヤモヤ感もいっぱいだが・・・。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■原作は?原作者は?監督は?主演は?■□■

私は、デビュー作『ホーンテッド・キャンパス』で日本ホラー小説大賞読者賞を受賞したという榎木理宇も、その最高傑作と謳われる『死刑にいたる病』(初版では『チェインドッグ』のタイトルで発売)も知らなかったが、白石和彌監督は近時、『凶悪』(13年)、『シネマ31』(195頁)、『彼女がその名を知らない鳥たち』(17年)、『シネマ41』(57頁)、『孤狼の血』(18年)、『シネマ42』(33頁)等で大活躍しているから注目している監督。また、チラシを見ると、日本犯罪史上最悪の犯罪者たる、連続殺人鬼・榎村大和を演じるのが、日本には珍しい異形の俳優、阿部サダヲだから、これは必見!

■□■弁護士の目には違和感も!■□■

弁護士50年近くになる私は、若い頃には殺人事件も数件担当した。しかし、もし私が榎村から「私選で弁護人になってほしい」と頼まれても、きつと断るはずだ。本作には死

刑判決を受けた榛村の弁護人が登場し、学生の身分であるにもかかわらず、素人探偵のようなことをやり始めた笈井雅也（岡田健史）に事件記録を見せる、というストーリーが登場する。しかし、これは全くナンセンス。こんなことをすれば弁護士自身が語っていたように、間違いなく懲戒処分になるはずだ。本作の弁護士業界のリサーチは一体どうなっているの？本作は弁護士の目には違和感がいっぱい！

榛村と笈井の関係は、笈井が中学時代に通っていた近所のパン屋の主人だっただけのものにも関わらず、榛村が笈井に依頼したのは、「死刑判決を受けた9件のうち1件だけは冤罪だ。真犯人は別にいる。それを調べてくれ。」という途方もないもの。したがって、何らかの事情で笈井がそれを引き受けたとしても、学生の身分に過ぎない笈井は一体どうやってそんな難しい依頼にチャレンジしていくの？ホンモノの探偵ならいざ知らず、本作はその点もかなりハチャメチャ！？

■□■怪優・阿部サダヲは大好きだが・・・■□■

私は、阿部サダヲの個性派俳優としての能力と魅力を認めている。しかし、本作冒頭から描かれる、阿部サダヲ演じる榛村大和という連続殺人鬼の人物像は長年弁護士をやってきた私にも全然理解できない。冒頭に見る“爪はがしの拷問”（の快感）に酔いしれている榛村の姿は、それだけで恐ろしい。本作では冒頭、24件に上るといふ榛村の連続殺人事件の概要が示されるが、なぜ今の日本でこんなことが可能なの？いくら榛村が、町のパン屋の主人として町に溶け込み、近所の人たちに溶け込んでいるとしても、こんな事態はありえない！

どうしても、そう思ってしまうから、本作のストーリーはハナから同調していくことができない。被害者の親族からの失踪届は？警察の捜査は？そして、24件もの被害者の死体は？焼いたの？それとも埋めたの？そこあたりの説明がとにかく不十分で全く納得できない。榛村と笈井の人物像に焦点を当てたいのは理解できるが、これではあまりにあまり・・・。

■□■殺人のターゲットは？『羊たちの沈黙』と対比すれば？■□■

榛村の殺人の手口は、狙いを定めた16~17歳の少年少女と長い時間をかけて信頼関係を築き、燻製小屋に連れ込んで拷問を加えた後に殺害するというもの。それにもかかわらず、9件目の被害者・根津かおる（佐藤玲）だけは24歳の成人女性であり、さらに山中で首を絞めて殺すという、他の事件とは違う突発的な形で殺していた。それが本作のストーリー構成のキモになる。

ちなみに、『羊たちの沈黙』（91年）では、アンソニー・ホプキンス扮する精神科医のレクター博士が、ジョディ・フォスター扮するFBI訓練生、クラリス・スターリングにさまざまな質問を投げかけ、さまざまな問題提供をしていたが、さて本作で榛村は笈井に対していかなる問題提起を？

■□■本作に見る“出自の秘密”は？笈井の父親はまさか？■□■

私が邦画のベスト1に挙げる、松本清張の原作を野村芳太郎監督が映画化した『砂の器』（74年）では、今は人気ピアニストに成長した主人公の“出自の秘密”がポイントになっていた。そのため、ある殺人事件から始まる同作は、ピアノ協奏曲の演奏会と、2人の刑事の執念の捜査をクロスさせながら、驚愕の結末に向かっていった。それと同じように（？）、本作に母親役として登場する中山美穂扮する笈井衿子は、笈井雅也に対して優しいものの、父親の笈井和夫（鈴木卓爾）はえらく冷たいのが気になる。こりゃひょっとして、笈井雅也にも、あっと驚く“出自の秘密”が？

他方、頭がいいのに希望する大学に入らず、三流大学に入学してしまった笈井は、その大学で中学時代の同級生だった女の子、加納灯里（宮崎優）と再会し、彼女の意外な面に気付いていくが、その展開は？さらに、本作のストーリー構成上、最大のポイントになるのが、髪の毛の長い男、金山一輝（岩田剛典）の存在だが、さてこの男はいかなる役割を？

■□■このサイコぶりに注目！“痛い遊び”から真相解明に！■□■

すべての犯罪にはそれぞれの動機がある。したがって、犯罪映画やスリラーものでは、その動機の解明がポイントになるが、本作のようなサイコススペンス映画ではなおさらそうだ。その点で、本作のキーマンになるのが、「髪の毛の長い男」役で登場する金山一輝。彼には弟がおり、子供の頃は兄弟そろって榛村から教えられた“痛い遊び”をして遊んでいたそうだが、さて“痛い遊び”とは一体ナニ？

1950年代のフランス映画の名作の一つに、ギターの主題曲が大人気になった『禁じられた遊び』（52年）があるが、同作はタイトルとは裏腹の、美しくも悲しい映画だった。それに対して、本作後半に詳しく解説される、榛村が金山兄弟に教えていたという“痛い遊び”はなんと陰惨なもの。その“痛い遊び”の解明を通じて、本作後半は榛村の深層心理を解明していくことになる。もともと、私でもそれはそれでわかるのだが、そのことが榛村の9番目の犯罪、すなわち、24歳の根津かおる殺しにどうつながるのかについては、私には？？それを理解するためには、原作との相違点を含めて白石和彌監督の意図をしっかりと勉強しなければならない。本作についてはネタバレ、情動的な評論がたくさんあるので、興味ある人はそれをしっかりと勉強してもらいたい。

2022（令和4）年5月27日記